

## 作品梗概集 2

1. ここに掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会での発表をまとめたものである。
2. 各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
3. 掲載の順序は、原則として、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
4. 初演年代は、原則としてデリエルコウフ＝オルスポウエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその研究者の名前を年代の後に付した。
5. 読者の便宜を考慮し、作品梗概集の末尾に索引を付した。

Mairet : *Chryseide et Arimand*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1625年（3月13日以前或いは5月13日以後）、オテル・ド・ブルゴーニュ座(Dotoli)

出版 1630年、ルーアン（無断出版）

出典 オノレ・デュルフェ『アストレ』（第3部、第7、第8巻）

この作品は、ジャン・メレの処女作であると同時に、アルディ、ヴィオ、ラカンの時代に続く新世代の作家群（コルネイユ、ロトルー等）の最初の作品という意味でも重要である。当時一世を風靡していた『アストレ』に題材を採り（30作余りある『アストレ』取材作品中の嚆矢をなす）、やはり大当たりをとったヴィオの悲劇『ピラムとチスベ』を大いに参考にして（特に一、二幕の筋立て）書かれている。劇規則への配慮はあまり見られない。舞台となる場所は、リヨン、ヴィエヌ、ジェルゴヴィとかなり離れた土地にまたがり、時間も、少くとも数日（ランカスターによれば、約一ヶ月）を要し、liaisons des scènesも数ヶ所で切断されている。滑稽な場面とか波瀾に富む展開、変装、Happyエンディング等の悲喜劇の趣向のほか、田園劇風の仕掛け（森の宿屋、供儀）や登場人物の多さ（役の上では18名以上）など、前古典期的色彩の濃い作品である。しかし筋の単純さ、見せ場の多い危難の設定、ドラマチックな台詞、主要人物の心の葛藤、bienséancesが殆ど守られている点等、「フランス古典悲劇の先駆的作品」（ランカスター）とまでは言えないにせよ、新時代を告げるに相応しい若々しく生気に富んだ作品と言えよう。初演後十年位は、オテル・ド・ブルゴーニュ座のレパトリーに入っていたと考えられる。

〔第一幕〕（ジェルゴヴィの城内）ブルギニョン王ゴンドボ Gondebautの朝臣ベリマル Bellimard は、先般の戦で、南仏の大身の子アリマン Arimand を捕虜にし、ここジェルゴヴィ（中央山塊

の北端)の城の牢につなぎ、多額の身代金をせしめようと目論んでいる。(牢内)一方、囚われの身のアリマンは、我が身の不幸、なかでも相思相愛のクリゼイド Cryséideとの別離を嘆いている。そこへ従者ベラリス Bellaris が面会にくる。奸智に長けたベラリスは、主人に代って身代金の準備に行くと城の者を欺き、主人同様余所に幽閉されているらしいクリゼイドの救出に行くことを申し出て、アリマンを喜ばせる。

〔第二幕〕 (リヨンの王宮の庭園内) ゴンドボ王に囚われているクリゼイドは、親に結婚を反対され駈落ちした相手のアリマンと、船の難破で別れ別れになり、今では彼が死んでしまったと思っている。悲嘆にくれているところへ、アリマンの従者ベラリスがやって来て、主人の生存と主人の代理で自分が救出に来たことを告げる。(王宮内)一方、ゴンドボ王は権力の絶頂にありながら、何か満ち足りない。それは余所に恋人がいるらしいクリゼイドに対する恋心のせいである。しかも無理やり我が物にするのではなく、彼女の真心が欲しいからである。

〔第三幕〕 (ジェルゴヴィ近くの森の中にある宿屋の前) クリゼイドは、夜陰に乘じ侍女と共にベラリスに助けられ、森の宿屋に辿り着く。(ジェルゴヴィ城の牢内)一方、ベラリスが出かけて一晩たって、不安にかられているアリマンのもとへ従者が戻り、クリゼイド救出の上首尾を告げる。そして今度はアリマンが従者の姿に変装して脱出すれば、という主人忠いのベラリスの提案を、アリマンは心苦しく思いながらも受け入れる。

〔第四幕〕 (王宮内) 放った追手がまだクリゼイドを捕えられないことに激昂するゴンドボ王は、クリゼイドの監視を委ねられていた女番人達を逮捕連行させ、追手の強化を命ずる。(森の宿屋前)一方、変装による脱出に成功したアリマンは、早朝、森の宿屋に到着し、愛するクリゼイドと再会する。そこへひょっこりベラリスも逃げてきて、追手が迫ってきていることを告げると、喜びも束の間、再会を約して男女別々に逃げることに慌しく決める。

〔第五幕〕 (ヴィエヌの宿屋内) 再会を約した宿屋に到着したアリマンは、未だ来ぬクリゼイドの身を案じている。そこへ、偵察に行っていたベラリスが戻ってきて、クリゼイドが再び王に捕えられたことを告げる。それを聞いてアリマンは気を失う。気絶から醒めたアリマンは、もはや万策尽き諦めるほかないと言うベラリスの忠告を押し切り、明朝夜が明けたらすぐリヨンの王宮に直行し、クリゼイドの再救出を敢行することを決意する。ベラリスも死地への同行を決める。(王宮内及び霊廟前に設置された祭壇の前)一方、ゴンドボ王は、折角クリゼイドを捕えたものの、喜びも半分。というのも彼女の心が他にあるのだから。結局、力づくでしか手に入れることができないのだ。そこで神々の加護を得るために供儀の式を行うことに決める。王の命令通り、「恋人達の墓」の前に祭壇がつくられる。式がはじまり、王と祭司の説得にもかかわらず、クリゼイドは心を変えず、供儀の式の中、突然、祭壇上の剣を取ると、「恋人達の墓」に逃げ込む。手を出せば、自裁を遂げようとの覚悟。そこへアリマンが飛び込んできて、王に直訴する。お触れ(クリゼイドの脱獄幫助犯を届け出た者に褒美を与える)に従い自首してきたので、その褒美としてクリゼイドの釈放を求める。王はその要求に応ずるが、犯人アリマンの死刑を宣告する。アリマンは喜んで縛につき、クリゼイドは後に続く旨を

約す。だがその時、ベラリスは王前に跪き、実行犯は自分であると申し出て主人アリマンの助命を嘆願する。王は、大いに驚き、怒り、悩むが、ついに、恋人達の愛の強さと従者の忠誠心を嘉し、三人を寛恕する。(皆吉)

Mairet : *La Sylvie*

ジャンル 五幕韻文田園悲喜劇

初演 1626年10～11月(Dotoli), オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1628年

出典 ラカン『羊飼の詩』*Les Bergeries*

初演は大成功を収め、その後4年間上演された。出版も、14版を重ねた。田園劇の代表作であり、この作品によって、メレは劇作家としての名声を得た。この作品には従来の田園劇と悲喜劇の組み合わせの面白さもあるが、成功の要因はそれよりも、従来の作品に無い台詞に盛り込まれた新鮮な叙情性にある。特に、「ディアローグ」と名付けられた、交韻二行のアレクサンドランでのシルヴィーとフィレーヌの応答が魅力となり、他の作家も高く評価し、多くの作品で真似られた。アントワーヌ・アダンは、この作品について「『シルヴィー』は、一種の風俗劇であり、その価値は家庭生活の観察、感情の控え目な繊細さ、質のいいリアリズムにある。そこに『羊飼の歌』の影響は認められるが、風俗喜劇への一步を印した」と述べている。この作品の成功によって、以後田園悲喜劇の上演が盛んになった。三単一の規則に関しては、場所の一致は、舞台がクレタ島から、シシリア島に移り、それも王宮とその付近の牧場の二箇所大きく分かれる。時の一致については、王子がクレタ島からシシリア島に到着するまで一週間前後が経過する。liaison des scènesは6回切れる。マウロの『覚書』によれば、舞台奥に王宮と祭壇(第五幕で使用)、脇に泉と樹木、反対側脇に洞窟を配した。第五幕では、小道具に稲妻、雷、魔法の鏡等を使った。

〔第一幕〕(クレタ王宮)王子フロレスタン Florestan は、シシリアの王女メリフィル Méléphile の肖像に魅せられて、シシリアに出発する。(シシリアの牧場)羊飼の娘シルヴィー Sylvie は、シシリアの王子テラーム Thélame と愛し合っている。羊飼のフィレーヌ Philène は、シルヴィーに恋しているが、彼女に相手にされない。(シシリアの王宮)テラームは、父親の国王アガトクレス Agatoclès の反対を恐れている。

〔第二幕〕(牧場)シルヴィーの両親は、彼女の王子との身分違いの恋に反対し、フィレーヌの後押しするが、彼女はきっぱり拒否する。

〔第三幕〕(牧場)フィレーヌは、自分に恋する羊飼の娘ドリーズ Dorise を利用して、二人の仲を裂こうと計画する。ドリーズは羽虫が目に入ったと言って、テラームに取ってもらう。シルヴィーは

その場を見て誤解し、テラームを非難する。テラームは絶望して、王宮に帰る。シルヴィーが嘆いていると、ドリーズが通りかかって真相を語る。

〔第四幕〕（王宮）国王はテラームと他国の王女の縁組を考えているが、シルヴィーとの仲を知り、怒る。厳しく処罰しようとするが、家臣から反対され、魔法の力を借りることにする。（翌朝、牧場）シルヴィーとテラームは仲直りする。テラームがちょっとその場を離れている間に、シルヴィーは王宮に連行される。それを知ったテラームは後を追う。

〔第五幕〕（牧場）フロスタンは、難破してシシリアに流れ着く。彼が疲れて眠りこけているところへフィレーヌとドリーズがやって来る。恋に破れたドリーズは自殺すると迫る。フィレーヌは彼女の真情にほだされる。フロスタンは目を覚ます。ここがシシリアで、テラームとシルヴィーが魔法で意識を失い、この魔法を解いた者にメリフィルが与えられると聞かされる。フロスタンは喜んで王宮に向かう。（王宮）二人は意識を失ったままである。国王は自分の処置を後悔している。フロスタンが到着し、魔法を解く。国王もシルヴィーの両親も喜び、二人の結婚を許し、フロスタンにメリフィルが与えられる。 (橋本)

Mairet : *La Silvanire, ou la morte vive*

ジャンル 五幕韻文田園悲喜劇

初演 1629年11月－12月14日、オテル・ド・ブルゴーニュ座 (Dotoli)

出版 1631年3月

出典 オノレ・デュルフェ『シルヴァニール』（1625年刊）（『アストレ』（第4部）にも同エピソード有り）

メレ自身の言を信ずるならば、1628年頃、la Valette枢機卿と Carmail 伯に、イタリー に傑作例のある規則に適った田園劇を書くように推められた。そこでメレは、デュルフェの散文田園劇『シルヴァニール』を下敷きにして、イタリーの田園劇を参考に規則を十分意識してこの作品を書いた。シェレルも、「当時なりの三単一の規則と bienséances を同時に 遵守した最初のフランスの劇作品」と認めている。実際、時の流れは朝から翌朝まで24時間の枠内にあり、場所はフォレ地方リヨン川の畔の数ヶ所が必要だが、タピスリーの使用を考えれば、ほゞ「場の単一」unity of the tableau（ランカスター）が守られている。筋立ては、デュルフェの作品から余分なエピソードをカットし、当時の考え方からすれば「単一」なものとする。又 bienséances に関しては、サチュロスの場を排除したり、多少いかがわしい人物、場面が現われるが、それも主人公達の徳を際立たせるためであり、あきらかに配慮が窺われる。たゞ、liaisons des scènes が8ヶ所で切れていたり、当時ではもう珍しいコーラス付ということもあるが非常に冗長（2724行）で、特に五幕が千行近くもあるのは、この作品の弱点と言えよう（作者自身認め弁明している）。この作品の上演は成功を収め、少くとも

三年間はオテル・ド・ブルゴーニュ座のレパトリーに入っていた。

しかしなんと言っても、この作品の演劇史上の重要性は、ユゴーの『クロムエル序文』に比せられる作品に添えられた「序文」にある。これは、1628年のOgierの手になるシュランドル『チロス国とシドン国』の「序文」に端を発した「規則論争」で、重要な劇作家中での規則擁護派の最初のマニフェストであり、出版後大反響を呼んだ。

〔序文〕1) 作品及び序文(「詩論」*petit Discours de la Poésie*)執筆の動機。詩法に無自覚でないことを示すため。2) 詩人は天賦の才が最優先するが、詩法を学ぶことも重要である。3) 詩を分類し、さらに劇詩を悲劇と喜劇に分け、その相違を述べる。4) 悲劇についてはアリストテレスや後代の祖述家達が十分述べているし、自分の田園劇は喜劇の範疇に入れられるので、以下で喜劇の条件について述べる。(i) 喜劇の構成は、プロローグ、提示部、展開部と大団円に分かたれ、主題は創作したものであること。(ii) 第二の条件は「筋の単一」で、「他のすべての筋が関わってくる一つの主筋がなければならない」。(iii) 第三の条件は「時の理法」*l'ordre du temps*で、「劇作品は少なくとも24時間の枠内になければならない」。(「場所の単一」の語は用いられていないが、「ある俳優が15分で地球の果てから果てまで行く」ようなことは許容しない)。5) ところでメレは、これらの規則の正当性の根拠を、単に古代作品の権威にではなく、観客の想像力を視聴覚の助けを借りて楽しませる(まるで本当に舞台上で事が起きていると思わせる)ものとしての「真実らしさ」に置いている。6) また、規則に則りしかも優れた作品をつくることの困難も認めており(短時間のうちに華々しい事件が次々に起こることは稀だから)、さらに規則に抵触する優れた作品が多数あることも否定しない。しかしだからと言って、規則を放棄するのは間違っている。数は少ないが規則遵守の豊かで優れた作品も存在するのだし、特に田園劇では主題が歴史に依拠しないだけ規則違反は許されないと述べる。7) 自作検討と正当化。

〔プロローグ〕 狂言回し役の「正しい愛のキューピッド」*l'Amour honnête*は自己紹介の後、数年前から、牧人アグラント *Aglante* と牧場の娘シルヴァニール *Silvanire* が祭壇の前で互に秘めた恋心を吐露しており、そろそろ彼らの恋患いに終止符を打とうと決めたことを語る。

〔第一幕〕 (リニョン川沿いの谷間の牧場。朝) シルヴァニールに対する真剣な恋に悩むアグラントは、彼女の両親が彼女を3日後に別の男と結婚させようとしているのを知り、又、シルヴァニール本人にもつれない仕打ちを受け絶望し、友人イラス *Hyias* に恋の仲介を頼む。

〔第二幕〕 (ブナの木蔭。正午) シルヴァニールは、父親が吝嗇で、金持の牧人テアント *Théante* との縁談を強要され、独り悩んでいる。と言うのも、誰にも口外してないが実はアグラントに恋をしているのだ。悲しみと疲れから眠り込み夢を見る。そこへ、アグラント同様彼女に恋をしている牧人ティラント *Tirinte* がやってくる。眠っている彼女に口づけをしようとしていると、彼女が目覚め、今見た夢を語る。さ迷い歩いて池の畔にくと、ティラントに声をかけられ水際までゆくと、突然恐ろしい蛇や魚が現われ気絶してしまう、暫くして目覚めると、ティラントが自分を墓に降ろしていた、というものである。それを聞いてティラントは、彼女につれなくされている自分の現実を訴え、我が

身を嘆く。彼女は友人のフォサンド Fossinde が彼を愛している、と言って慰める。彼女が立ち去ってティラントが恨み言をつぶやいている所に、友人のアルシロン Alciron が現われ、彼の恋の悩みを聞いて助力を約束する。

〔第三幕〕（リニヨン川の岸辺）アグラントは友人イラスのとりなしも失敗し、相変らずシルヴァニールからもつれなくあしらわれ、絶望の態。シルヴァニールの方も両親から金持との結婚を強いられ逃げ回っている。一方、ティラントは友人アルシロンから魔法の鏡を手に入れる。その効力に半信半疑でいるところにシルヴァニールが現われ、鏡を受け取り我が身を写すと、彼女は目を回してしまふ。

〔第四幕〕（川の岸辺。夕方）牧人達がいるところへ使者が訪れ、シルヴァニールが突然病に倒れ危篤であることを告げる。それを聞いてアグラントは気絶する。ティラントは自責の念にかられ、元凶のアルシロン追討に向かう。そこへ、当のシルヴァニールが両親に支えられ、神殿への治療祈願のために通りかかる。気絶しているアグラントを目にしたシルヴァニールは必死の介抱をする。その甲斐あってアグラントは息をふき返す。しかし今度は、シルヴァニールの方が再び苦しみはじめ瀕死の態。役割り替ったアグラントの介抱で、暫し目覚めたシルヴァニールは両親に、先に死ぬ不孝を詫び、さらにせめてアグラントの妻として死ぬ許しを求める。勿論、両親は同意するが、アグラントの絶望的な介抱（体や口への口づけ）も空しく仮死状態に陥いる。

〔第五幕〕（川の畔のシルヴァニールの墓前。夜明け前）アグラントは、独りシルヴァニールの墓前にきて死を決意し、剣を取りに去る。入れ換りにティラントは、やっと、舟に乗って逃げようとしているアルシロンをつかまえる。アルシロンは、鏡の秘密（シルヴァニールは魔法にかけられただけで死んではいないこと）を白状する。そしてティラントの恋を成就させるため、墓を暴いてシルヴァニールに解毒剤を振りかけ、立ち去る。シルヴァニールの覚醒。生き返った彼女に、ティラントは結局は自分の奸計を告白してしまう。しかしそれも彼女の心を掴むのに無益だったと知ると、彼女を無理やりさらって行こうとする。丁度そこへ、シルヴァニールの墓前で死のうとしてアグラントが戻ってくる。助けを求めるシルヴァニールの声を聞いて、アグラントは彼女を救出する。ティラントの逮捕連行。知らせを聞いて駆けつけてきたシルヴァニールの両親に、アグラントは改めて結婚の同意を求めるが、父親は拒絶する。あまりの非情、吝嗇に母親も呆れるが、父親は意気軒昂。アグラントはドルイド僧のところへ裁定を頼みに行くが埒があかない。結局、金持アグラントが結婚を辞退して、やっと父親も二人の結婚を許す。また死を覚悟したティラントも、フォサンドの熱意で罪も許され、二人も結ばれることになる。コーラスの祝婚歌。（皆吉）

Mairet : *Les Galanteries du duc d'Ossonne*

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1633年謝肉祭(Dotoli), マレー座  
出版 1636年  
出典 不明。主人公のドッソヌ公爵は、アンリ四世時代に実在したナポリの副王(1579-1619)である。

メレは、1632年モンモランシー公爵の死後、ブラン Belin 伯爵の庇護を受け、伯爵の後援するマレー座のためにこの作品を書いた。メレはその序文で、自作のおかげで「いまでは最も貞淑な婦人たちも、外聞を気にしたり、醜聞になったりせず、リュクサンブール公園を訪れるようにオテル・ド・ブルゴーニュ座へ行くようになった」と誇っていることは名高い。しかし、老人の夫が笑い者にされ、姦通が非難されずに是認されている不道徳性は、多くの批評家が指摘するところである。中でも、主人公が女性のベットに乗る場面は、17世紀の喜劇の中でも最も大胆な場面の一つである。ランカスターは、「その本質的な不道徳性と喜劇的状況の強調によって、コルネイユの喜劇より笑劇やイタリア喜劇に近い」と述べている。この芝居は、十分な成功は得られなかった。三単一の規則に関しては、時間は数日、場所は通りに面した家で当時の規則の許容範囲を越えてはいない。シェレールは、背景幕の典型的な使用例としてこの芝居を挙げている。一軒の家の内部が二部屋の仕切られ、家の中での出来事が演じられる場合は、家の外観を描いた背景幕を引くことで、内部の各部屋が現れる。背景幕を使用することで場面の移動を表し、映画のトラヴェリングに近い技法を用いている。liaison des scènes は6回切れる。

〔第一幕〕(ドッソヌ公爵 Le Duc d'Ossonne の家)妻の恋人カミーユ Camille を殺したポーラン Paulin は、公爵に保護を求める。公爵は彼を自分の別荘に匿う。密かに彼の妻エミリー Emilie に恋している公爵は、これで人目をはばからずに彼女に会えると喜ぶ。(ポーランの家)エミリーは、恋人を年老いた夫に殺されたことを嘆いている。ポーランが帰って来て、市を抜け出すと告げる。ポーランは、妹のフラヴィー Flavie に夜も同じ寝台で休み、エミリーを監視するよう頼む。

〔第二幕〕(ポーランの家の前)二日後、公爵は、エミリーに会おうと忍んでやって来る。そこで一人の男が絹の梯子に登ってポーランの家に入るのを見掛け、公爵も後に続く。(家の中)男はエミリーの男装した姿で、いまわの際の恋人をみとりに行く為の変装だった。公爵は、カミーユの死後自分の寵愛を受けるという約束でエミリーの身代わり役を引き受ける。

〔第三幕〕(フラヴィーの部屋)フラヴィーは、二人の対話を盗み聞きしていたが、以前から公爵に思いを掛けていたので、寝たふりをする。エミリーの身代りになった公爵は、フラヴィーを見て、その若さと美貌に魅せられて、彼女を口説く。エミリーが帰宅し、カミーユの生命には別状が無いと公爵に告げる。通りに出て、公爵は、エミリーとフラヴィーの二人とも手に入れようと決心し、エミリーに恋文を出すことにする。

〔第四幕〕数日後、傷の癒えたカミーユは、ポーランへの復讐を口実に彼の妹のフラヴィーに恋文を送る。(ポーランの家)フラヴィーは、恋文を受け取るが、信じられない。エミリーが、公爵から

の恋文をフラヴィーに見せつけると、嫉妬からフラヴィーもカミーユからの手紙を彼女に見せる。エミリーに公爵からの夕食の招待が来る。

〔第五幕〕（ポーランの家の前）カミーユはフラヴィーの誘いに乗って忍んで行こうとする。公爵もエミリーの誘いで忍び込む。フラヴィーは、相手を間違えて公爵を寝室に引き込む。カミーユはエミリーと鉢合わせし、真相がばれる。公爵とカミーユは彼女達に許しを乞い、仲直りする。公爵はエミリーを、カミーユはフラヴィーを相手に決める。そこへポーランが妻恋しさに帰ってくる。一計を案じて、カミーユが舞台裏で大声を上げると、ポーランは逃げ出す。邪魔者を退散させ、一同は乾杯する。（橋本）

### Rotrou : *Les Occasions perdues*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1629年、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1635年

主な出典 ローペ・デ・ヴェーガ *La ocasin perdida*（1611年刊）

「要約不能」impossible à résumer（ギシュメール）と評されるほど、統一性を欠いた複雑な筋立ての作品である。が、劇的興味のポイントは、暗闇の中での様々な人物の取り違え、この一点にある。つまり、原作の喜劇的要素を減少する努力がなされているにもかかわらず、悲喜劇というよりむしろ喜劇に近い。戦闘場面はあるが深刻な事態には至らず、愛されない人物の絶望も回復可能な程度のものである。大団円で四組ものカップルができあがってしまうのも、同時代の演劇の一般的解決方法がいくら結婚にあるとはいえ、いささか茶番劇めいている。ともあれ傑作とはいえないが、「活気にあふれ、楽しめる」（ランカスター）芝居であろう。時は2日間、場所はナポリ女王の宮殿とその周辺、liaisons des scènesはしばしば無視されている。

〔第一幕〕 ナポリの女王は、狩りの途中、森の中で三人の男に襲われていた美貌の外国人を救う。彼の名はクロリマン Clorimand、スペインの貴族であり、シチリア王の使節となって三人の貴族を伴い、王との結婚を女王に申し込みに行く途上であった。実はこれは畏で、かねてクロリマンと王の姉妹との恋愛を妬んでいた奸臣たちが王に讒言し、ナポリ女王の宮殿に近付いた時点で伴の貴族に暗殺命令書を開封させ、国家に対して陰謀を企てた罪でクロリマンを亡き者にしようという筋書きであった。女王は彼の高潔な人柄とエキゾチックな美貌に深く心を奪われてしまう。一方、暗殺に失敗した三人はもともと彼を敬愛しており、不首尾をむしろ喜んで帰国する。

〔第二幕〕 女王の宮殿。女王付きの女官イザベル Isabelle と恋仲のアドラスト Adraste は、彼女を熱愛し始終後を追っている。狩りからひとあし先に帰った彼は、途中で遭遇したクロリマンの事件を彼女に語る。やがて一行が帰還、女王は皆をさがらせてイザベルにクロリマンへの思いを打ち明け

る。しかし女王としての自尊心が自分より地位の低い男に恋を告白するのを妨げている。そこでイザベルの名を借り、今夜逢引を申し込む恋文を書くことにした、と。イザベルは、恋人をも欺くことになるので躊躇するが、百人騙せば百人から愛される、と言う女王の強引な説得に負け、クロリマンを愛するふりをするのを承諾した。さて、女王を密かに愛する重臣クレオント Cléonte は、女王がクロリマンの魅力に心を動かされたのを既に察知し、先手を打ってクロリマンに自らの恋心を告白する。クロリマンはむしろイザベルに魅かれていた。そこに従者がイザベルからの恋文をクロリマンに手渡す。クレオントは差し出し人が女王ではないかと怪しむが、イザベルの署名を見てその場は安堵する。

〔第三幕〕 秘密の逢引にはうってつけの闇夜。疑念が一扫できないクレオントは、クロリマンにつき従って逢引の場所である中庭まで来るが、うるさがられて追い帰される。クロリマンは従者を見張りに立て、イザベル(実は女王)が待つ窓辺へ忍び寄る。従者は睡魔に負けて眠り込んでしまう。クロリマンは、恋人がはっきり顔を見せてくれないのといつまでも焦らされるのにと苛立ち、抗議する。彼女は女の名譽を盾にして抗弁するが、明晩、今夜のように闇夜だったら思いをかなえる、と約束。ところがそこにアドラストがやって来る。イザベルと何度も逢瀬を重ねたその場所に、今夜ももしや彼女が来ているのではないかと。クロリマンはクレオントが戻って来たものと思い、彼との友情にかけて、イザベルへの恋は真剣であり、邪魔をしてほしくない、と懇願する。アドラストは逆上し剣を抜くが、思い直して一言も発さず引き上げる。

〔第四幕〕 イザベルはアドラストへの貞節と女王への忠誠の間で葛藤している。アドラストが現れ、昨夜の中庭での出来事を全て語って彼女を非難し、自分は宮廷を去る、と言う。彼女は女王の策略を暴露しようとするができない。彼女が場をはずしている間にクロリマンがアドラストを引き止めにやって来る。アドラストは彼に贈り物と称しイザベルからの恋文の束を渡して去って行く。手紙には彼女の髪の毛や肖像画も同封されていた。衝撃を受けたクロリマンは戻って来たイザベルの浮薄な心を責め、立ち去ろうとする。彼の美貌と美しい精神に既に魅了されていた彼女は、彼の嫉妬に心動かされ、泣いて引き止め真の愛を誓う。ふたりは今夜の逢引を約束する接吻を交わし、彼は去る。が、女王に接吻を見られてしまい、イザベルは演戯の一部だと言い訳するが、女王はやり過ぎだと非難、女官の任を解く。さてシチリア王アルフォンズ Alphonse は、帰還した貴族たちから女王の美貌を伝え聞き、自ら自分自身の使節に変装し、求婚にやって来た。女王は重臣クレオントに相談し、政治的野心より自身の幸福を大切にしたい、と打ち明ける。女王の思いは自分にある、と早合点した彼はその幸福を追求するよう勧めるが、相手の名を聞き、絶望。クロリマンへの殺意を露わにして退場。

〔第五幕〕 女王は今夜の逢引を約す手紙を従僕に託す。「あのスペイン人に」と。彼は、だが、同じスペイン人のアルフォンズに渡してしまった。手紙の内容は、彼の正体を女王が知っているものとすれば、意味の通るものだった。一方、クレオントはアドラストを連れ戻し、クロリマンを愛しているのはイザベルでなく、女王であることを告げる。深夜、希望を取り戻したアドラストはイザベルの館へ向かう。戸口で待っていた彼女は当然クロリマンだと思い、名を呼ぶ。アドラストは愕然とし、クレオントの虚言を呪うが、クロリマンになりすましてこの機会を逃さないことに決め、彼女につい

て部屋に上がる。やがてやって来たクロリマンは物音を聞いて隠れる。それは隣接する女王の館に忍んできた王だった。そこにクレオントが切りかかり、卑怯な闇討ちに怒ったクロリマンは王に加勢、クレオントは逃走する。王は命の恩人がクロリマンと知って以前の過ちを悔悟し、また自らの恋の経緯を語り、ちょうど現れた女王の従僕について部屋に上がる。クロリマンは戸口に残った女王がこれでクロリマンは私のもの、と言うのを暗闇の中で聞き、驚愕する。と、クレオントが再び部下を率いて舞い戻り、女王の寝室にいるクロリマンを殺せと騒ぎ立てる。イザベルがそれを聞きつけ、彼は私の胸の中にいる、と窓を開けて抗議。クロリマンはまた仰天する。だがアドラストが勝ち誇って姿を現す。彼女は操を与える相手を間違えたことに気付いたが時既に遅し、諦めてアドラストと仲直りする。あまりの騒ぎに女王も起き出し、やはり相手を間違えたことに気付く。怒りのあまりアルフォンスを殺そうとするが、クロリマンが闇から飛び出して彼の身分を明かし、王と結婚するよう女王を説得する。いずれにしろ自分には運がなかった、と。女王は納得し、クレオントに従姉妹を、クロリマンには以前の恋人である王の姉妹を与えることにする。が、まだ朝には間がある、もうひと眠りを、という女王の提唱で、皆それぞれの思いを抱えて寝床に就くことにする。(鈴木)

Rotrou : *Cleagénor et Doristée*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇

初演 1634年初頭、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1634年

主な出典 Charles Sorel の小説 *Histoire amoureuse de Cleagénor et de Doristée* (1621), 全4巻のうち, 3・4巻

同時代の小説の脚色。原作の余分な登場人物は消去され、ドリストエの受難に的がしぼられてはいるが、ランカスターは「ロトルーの最も拙劣な作品のひとつ」と酷評する。確かに、運命の転変を強調するあまり御都合主義的な偶然が介入しすぎたり、筋の一貫した発展や面白くなりそうな場面の進展を、無理に妨げる小細工が多すぎるきらいがある。場所は森の中と邸内に分けられ、前者における冒険劇的な性質と、後者における家庭内喜劇的な性質の二分割も、作品全体の印象を弱めるものでしかない。しかしながら、盗賊の生活と意見、女の側からの積極的な口説き、日常生活の描写など、bi-enséanceに反するリアリスティックな場面が、一方でこの芝居を興味深いものにしていても言えよう。当時はかなり成功を収めたらしい。なお、時は三日以上、liaisons des scènesの規則は荒唐無稽な筋立にもかかわらず、ほぼ守られている。

〔第一幕〕 森の中をさまようクレアジェノールCléagénorは偶然友人のテアンドルThéandreに出会い、我が身の不運を物語る。彼は婚礼前夜に恋人を恋敵に奪われ、彼女ドリストエDoristéeを捜し求めて旅に出たのだった。同情した友人は助力を約して別れる。そこへ女の悲鳴が聞こえ、駆けつけ

たクレアジェノールはまさにドリステが犯されようとしているのを見る。彼は剣をふるって男を殺し、恋人を救出する。その男はクレアジェノールの恋敵の腹心でありながらドリステの魅力に負け、彼女を自分のものにしようと小姓の姿にして共に脱出してきたのだった。が、再会の喜びも束の間、彼が彼女のために水を汲みに行った際に彼女は盗賊に拉致され、彼の方は殺人容疑で逮捕されてしまう。

〔第二幕〕 小姓姿のドリステは盗賊たちにフィレモン Philémond と名乗り、仲間になるふりをする。通りかかったテアンドルが彼らの犠牲になりかかるが、ドリステは彼を襲うと見せ掛けて彼の側につき、盗賊たちを潰走させる。彼は彼（女）を妻の小姓に雇うことにする。場面は変わってテアンドル邸。妻のドラント Dorante が「不吉な夢」を侍女ディアヌ Diane に語る。狩の獲物のノロジカに夫婦ともども夢中になってしまった夢である。そこに夫がドリステを連れ帰る。

〔第三幕〕 ドラントもディアヌも美貌の小姓に心を奪われてしまった。女主人は小姓とふたりだけになりたくて侍女を退らせるのに四苦八苦し、侍女は何とかして居残ろうとやっきになる。ようやく独りになれたドリステは運命に翻弄される我が身を嘆く。テアンドルはそれを立ち聞きしてしまい、小姓が友人の捜していた恋人だと知る。つまり小姓の真の性も知るわけである。彼は彼（女）が「昔の恋人に生きうつし」であるのを理由に接吻を求め、進退極まったドリステは正体を明かす。彼は初めて知ったかのように驚き、クレアジェノールの捜索を約束するが、また、妻の嫉妬を避けるためにしばらくは小姓の姿のままでいてほしい、と頼む。

〔第四幕〕 悩みの果てにディアヌは、小姓に恋を告白し、結婚を迫る。が、小姓は自分が快樂のみを追う人間であることを強調し、彼女を脅えさせ、退けてしまう。次にドラントが小姓を口説き、キスを求める。ところが、立ち聞きしていたテアンドルが怒りに燃えて姿を現し、ドラントは退去。テアンドルは妻を捨てる決意を述べ、ドリステに愛を告白する。彼女は家庭不和の原因となった自分を責め、故郷に帰る意図をもらす。彼は引き止め、愛を無理強いしないことを誓う。

〔第五幕〕 ドリステは戯れにドラントを挑発した後、胸をはだけて女であることを証明、全ての事情を打ち明けた。夫の恋愛をも知ったドラントは現場を押さえるため、隣室に身を潜める。そこにテアンドルが従者を伴って現れ、クレアジェノールが恋敵に殺された、と従者に偽りの報告をさせる。ドリステはひとり悲しみにひたるため、隣室にさがる。従者は主人の無分別を責め、テアンドルもしばらくためらいはしたが、結局離婚の決意を固めた。ドラントは飛び出して夫を非難。同じ様に恋をしたのに、世間は男を許し、女を弾劾する、と。彼女は自殺するために夫の剣を奪おうとし、ふたりはもみ合うが、従者が仲裁に入る。そこへクレアジェノールの来訪。彼はとうに釈放され、今しがたついに恋敵を倒してきたところである。テアンドルはまたも偽り、ドリステは純潔を守ろうとして盗賊に殺され、下手人はここに捕らえてある、と語る。クレアジェノールは殺害者との対面を求めるが、連れられて現れたのはドリステだった。喜びを増すための策略だった、とはテアンドルの弁。皆満足して退場するが、ディアヌのみひとり残る—「じゃああたしの純潔は、いくらあたしが差し出しても、どうってことなかったんだわ。」

（鈴木）

Tristan L'Hermite : *La Mariane*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1636年 春, マレー座 (Abraham)

出版 1637年

主な出典 Flavius Josephe : *Antiquités Judaïques*(livre 15)

Père Caussin : *Cour Sainte*

先行作品としては同名の悲劇がアルディにある。トリスタンの最初の劇作品。名優モンドリー Montdory の迫真の演技により大成功をおさめ、再演の回数も多い。演劇史からみても重要で、例えばシェレールは、メレの『ソフォニズブ』とともに、以後流行する悲劇の基礎を築いたと評価する。また、トリスタンが試みた情念の探究は、コルネイユ、ラシーヌへと引き継がれ、特に、主人公エロードの役割は、劇展開の契機に自らがなっていくという意味で、フェードルに通じるものを持っている。また、夢を舞台に独自の方法で取り入れた。場所は五個所で、数時間のうちに終局を迎える。

〔第一幕〕 ユダヤの王エロード Hérode の私室。悪夢にうなされてエロードはとび起き、姉妹のサロメ Salomé, 兄弟のフェロール Phérole を呼ぶ。王位篡奪を謀って昔暗殺したアリストビュルが亡霊となって夢に現れ、彼の過去の悪行を非難し、王と王国の滅亡を予言したのだった。フェロールは予知夢を否定し、王の気持ちを鎮める。王も戦乱をおさめ国を平和にした功績を思い出して自信を取り戻すが、アリストビュルの姉妹で、今は彼の妃であるマリアヌヌ Mariane のあまりの冷たさに身の不運を嘆く。姉妹たちは王妃の悪意を吹聴。が、愛に飢えたエロードは妃を呼びに人を遣わす。

〔第二幕〕 マリアヌヌの私室。マリアヌヌはエロードの残酷さに嫌悪の情を募らせている。夫が兄弟の暗殺者であるばかりではなく、彼女を密かに裏切ったからだった。王は自分が外地で死んだ時は妻も殺せ、という秘密の命を出していたのだ。ところが、夫を誹謗する言葉を、サロメに盗み聞きされてしまう。二人の言い争い。激怒するサロメはかねてからの陰謀計画を実行に移すことにする。一方、マリアヌヌは王の寝室へ。が、態度を軟化させず、エロードの怒りを誘発、部屋から追い出される。その時サロメは、王妃に国王暗殺計画のあることを手下の者に密告させる。王は裁判開廷の決意をする。

〔第三幕〕 元老院。エロードは妃と密告者を召喚し真実を知ろうとするが、マリアヌヌは、身の潔白を積極的に証明しようとはせず、ただ、夫を暗殺者、裏切り者と非難し、死を求めるばかりだ。姉妹たちの意見を取り入れ、王はマリアヌヌを死刑に処そうとするが、後に残すことになる子供たちのことを思って妃が涙を流すのを見ると、王は許しを与える気になる。しかし、それを王妃は拒否し、王が国を留守にするにあたってだした秘密の命令に言及し、彼をなじる。王は秘密を託した従者と妃の仲を疑い嫉妬に燃え、従者を拷問にかけて殺し、妃を塔に幽閉する。

〔第四幕〕 エロードの私室。エロードは、マリアヌヌの貞節を疑い毒殺計画の密告を信じて死刑を決めたものの、彼女の死は自身の死に等しく、その先どうやって生きていけばよいかわからない。

殺すか生かすか、国の安泰か妃への愛か、の相反する二者に気持ちが引き裂かれ、一度は妃を許そうとするが、サロメたちに制止され、国家の安全をはかってセザールに使者を送り裁判の結果を報告させる。一方、マリアンヌは塔の牢で身の不運をかこつが、毅然として死を受け入れ、父や兄弟のもとに行こうと決意する。処刑台に引かれて行く途中で彼女の母が現れ、身を守るため、本心を隠して娘に罵詈雑言を浴びせかける。

〔第五幕〕 エロードの私室。エロードは、再びマリアンヌを許そうとする。妃が死ねば自分も後を追うより仕方がないからだ。しかし、そこに届いた知らせは、王妃の処刑終了の報だった。妃の最期が語られると、王は自分を呪い激怒して自殺を企てる。取り押さえられると、ユダヤの人民に王妃殺しのかどで自分を罰するように懇願する。また、天に対し国に不幸をもたらすように願う。そして錯乱し、現実を忘れて王妃に会いたい、と言い出す。そばに来ていたサロメたちは王にマリアンヌの死を思い出させ、慰めるが、王は怒り狂い、常に妃の死を強く主張していた姉妹らを追放。正気に戻った王は、妃のために神殿を建てようとするが、そこで再び錯乱し、マリアンヌを呼びに人を遣わそうとする。従者の説明で現実を思い出し、再度妃の死を悲しむが、その時、彼は妃が天に昇って行く姿を認め、幻想の中で彼女と対話をする。彼女に許しを乞い、従者の腕に倒れる。夢の予言は実現したのだった。 (野池)

Tristan L'Hermite : *Panthée*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1637-38年、マレー座 (Abraham)

出版 1639年

主な出典 クセノフォン：『キュロスの教育』

競合作品 Durval : *Panthée*, オテル・ド・ブルゴーニュ座 (?)

五作ある先行作品のうちアルディの『パンテ』が唯一トリスタンの作品執筆に参考となったと考えられる。デュルヴァルも、本人の主張するところによると、トリスタンより先に『パンテ』を書いているが、類似点はあるもののトリスタンへの影響はみられない。デュルヴァルの悲劇は古典の規則に大幅にはずれていたが、ランカスターは、年代から言って、トリスタンの競合作品として、オテル・ド・ブルゴーニュ座で上演されただろう、と考える。前作の大成功に気をよくしたトリスタンは、再びモンドリーのために悲劇を執筆。アラスプ Araspe を運命的な恋に陥り苦悩する男として描いて、この評判の男優にあてた。しかし、パンテを中心に展開する主筋の他に副筋ができ、統一が損なわれ、また、観客からも余り評価されなかった。ドービニャック師は『演劇作法』の中でこの悲劇を細部に渡って検討し、批判している。一方、ベルナルダンも、モンドリーの病気とル・シッド論争の影響を考慮し『パンテ』をもっと評価すべきだと考える。場所は三箇所、時は十二時間以内。前作に引き続

き夢が使用されるが、効果の度合いは薄れる。

〔第一幕〕 野営地。ペルシア王シリユス Cirus はアッシリアであげた勝利を喜ぶが、それに酔いしれてはいけないと自戒し、正義が国の隅々まで行き渡らなければならないと考える。また、捕虜となった敵側の王妃パンテも丁重に取り扱わなければいけないとするが、そこにそのパンテが現れ、シリユス王の寛大な態度に感謝し、王の味方になるように夫アブラダート Abradate に手紙を書いた、と言う。シリユスは王妃の世話を寵臣アラスプに託す。パンテが退出すると、シリユスは野営地の点検にでかける。王と別れたパンテに、アラスプは彼女を賛美する言葉を並べるが、パンテが夫の名を口にした時、顔色を変え、卒倒する。パンテは供の女性シャリス Charis に彼の介抱をまかせて立ち去る。意識を取り戻したアラスプはパンテへの愛をシャリスに打ち明ける。

〔第二幕〕 野営地付近の森の中。アラスプは、未来のない愛の情熱に苦しみ、嘆いていると、そこにパンテがシャリスと近付いて来るのに気付く。彼は覚書帳をとりだし、何とか彼女の気に入られようとし、書き物をしている振りをする。一方、パンテは夢で夫自身の口からその死を知らされたため、それが凶事の予言となるのではないかと恐れ、夫の安否を気遣う。アラスプの姿に気付き逃げようとしたが、既に手遅れだった。パンテの問に対し、アラスプは、相手に愛を打ち明ける勇気のない男の気持ちを覚書帳に綴っていると答え、それを機にパンテに思いを告白する。しかし、パンテは怒り、侮辱されたとシリユスに訴えに行く。アラスプは絶望の淵につきおとされる。

〔第三幕〕 野営地。シリユス王にアラスプの件で直訴して来たパンテは、即刻彼に罰が下ると良いとシャリスに話すが、シャリスはアラスプに同情的で、また、その恋愛事件でパンテの名声に傷がつくことも恐れ、訴えを却下するように勧める。そこに夫の手紙が届いたことが知らされ、パンテは喜び自分のテントに急ぎ戻る。アラスプは、シリユス王の怒りを逃れて逃亡するよう友人に勧められるが、パンテの愛がなければ生きていても仕方なく、今は静かに死を待つ心境になっている。王の前に出頭し王から怒りの言葉を浴びせかけられる。しかし、王はアラスプの余りにも悲痛な姿を見、罰すべきか許すべきか心迷う。そこへ、パンテが夫の手紙を持って現れ、彼が二時間以内に到着し、シリユスの側につくことを皆に知らせ、アラスプには許しを与えるようお願い出る。王は彼女の願いを受け入れ、アラスプを許す。

〔第四幕〕 野営地。パンテとアブラダートが再会する。アブラダートはシリユス側につくことにしたが、妻と王の関係を疑って嫉妬する。パンテは懸命に自分の貞節を弁護し、夫の疑いを晴らす。敵方のスパイが見つかりすぐに次の戦が始まろうとする時、二人の王は会見し、お互いを賛美しあう。また、アブラダートは協力を約束する。カルカスが戦勝に向けて犠牲の式をとりおこなうために、姿を現す。

〔第五幕〕 野営地。アブラダートが戦死したという噂を聞いたアラスプは、恋仇の消滅とともに自分の恋にも可能性が生じるため、喜び、真相を確かめる。一方、パンテは、バクトロス川の岸辺で、夫の亡骸を前に後悔の涙にくれている。彼女を慰め、援助の手をさしのべるシリユスの目を欺き、人払いをして自殺する。アラスプはパンテが死んだのを見て、自分も岩場から飛びおり、死ぬ。

(野池)

Tristan L'Hermite : *La Mort de Sénèque*

ジャンル 五幕韻文悲劇  
初演 1643-44年(？), 盛名座(？)(Abraham)  
出版 1645年  
主な出典 タキトゥス『年代記』

タキトゥスの他に, Père Caussinの*Cour Sainte*(1624), Mascaronの*La mort et les dernières paroles de Sénèque*(1637)や, また, 当時流行していたDesmarets de Saint Sorlinの小説『アリアーヌ』も参考にしたと考えられている。ローマの陰謀劇『シンナ』の成功にヒントを得て執筆したと推測される。初演の年代や劇団は確定されていないが, エピカリス Epicarisの役をマドレーヌ・ベジャール Madeleine Béjartが演じたという記述は残されている。初演当時は一応の成功を得たものの, 47年以降の出版はなく, 上演も余りされなかった。古典悲劇というよりも, シェイクスピア的な面がしばしば指摘されている。かなりの不自然さが残るものの場所は一箇所に統一されていて, 時の一致も守られている。筋は, セネカの死に関するものと, 陰謀に関するものの二つがある。なお, 1984年3月に, ジャン=マリー・ヴィレジェ Jean-Marie Villégierの手により発掘され, コメディール=フランセーズで上演, 現在に到るまで再演されている。

〔第一幕〕 皇帝ネロン Néron は后オクタヴィーの死を喜び, 解放感に浸るが, 彼と相愛の仲のサビーヌ Sabine は, 敵側の巻き返しを恐れ, また, 特にネロンの恩師セネカ Sénèque の人に屈しない態度が気に入らず, ネロンに対して, セネカの挙動に細心の注意を払わなければならないと助言する。ネロン自身は, 最初は, セネカに疑いは持っていなかったが, サビーヌの下心ある考えに次第に傾いて行き, 疑惑を深める。そこに, セネカが現れ, ネロンから贈られた財宝を返し, 田舎に隠居したいと申しでる。セネカ自身も, 身の危険を感じていたのだった。しかし, ネロンはそれを拒否する。

〔第二幕〕 ピゾン Pison , リュフュス Rufus , セヴィニウス Sévinus , の三人が集まり, ネロン暗殺の計画を練っていると, 女性解放奴隷のエピカリスがセネカの甥のリュカン Lucain とともに現れ, 謀議に加わる。彼女はネロンの命によって繰り広げられたローマの街の凄絶な死のスペクタクルを喚起し, 計画の早い実行を皆に促す。決行の時(翌日)と場所が定められ, 散会。リュカンはエピカリスとその場に残り, 更に話を続けているうちに, お互いの愛が明らかになってくる。セネカの姿を認めたエピカリスは身を隠す。リュカンは予定通りセネカに計画を知らせるが, セネカ自身は, 黙認するだけで, 参加はできないとする。セネカが去り, 再び若い二人だけに。エピカリスは海軍大尉のプロキュール Procule の姿を認め, リュカンを物陰に隠すが, 理由不明のまま, 彼に逮捕される。

〔第三幕〕 プロキュールの密告でエピカリスを捕えたネロンは, 皇帝暗殺の陰謀に関して彼女に審問し, また, プロキュールとも対面させ論争させる。彼女は巧妙に言い逃れたが, ネロンはそれを信用せず拷問にかけることにする。サビーヌが姿を現し, 水辺でまどろみながら見た悪夢をネロンに語り, また, それに関連して, セヴィニウスの解放奴隷が話があると言って来ている, と告げる。セヴィニウスが皇帝の暗

殺を計画しているようだ、と知らされたネロンは、当人を呼びつけ、真偽を確かめようとする。しかし、なかなか白状しないのに業をにやしたネロンは、彼の監視を命じ、自分はあることを確かめるため、退出する。

〔第四幕〕 リュカンからエピカリスの逮捕を知らされた首謀者のピゾンは、秘密の発覚を恐れるが、彼女の勇気とモラルをリュカンは彼に強く保証する。そこに、リュフュスが現れ、セウニユスの逮捕を知らせる。一方、ネロンは、再びセヴィニユスを審問。仲間の一人が裏切った、と彼に察しさせ、罪を白状させる。共犯者の名を得るために、ネロンはリュフュズを使い、セヴィニユスを強迫させる。リュフュズが真剣に責めるので、セヴィニユスは怒り、遂に、彼も仲間であることを漏らししてしまう。リュフュズの逮捕。ネロンはさらにセヴィニユスを脅し、共犯者のリストを手に入れるが、計画の規模の余りの大きさに驚く。セネカの甥の名も含まれていた為、殊にサビーヌが、セネカの死刑を主張。

〔第五幕〕 セネカは死が間近なことを悟り、天上の生活を思い描く。彼の妻が現れ、ピゾンの友だと言った夫の大胆さがいかに危険なものか述べるが、セネカとしては信条を曲げる訳にはいかなかった。そこに、死を命ずるネロンからの使者が到着。一方、ネロンは共謀者全員を逮捕できるかどうか危ぶむ。拷問に負けなかったエピカリスに、セヴィニユズを使って、更に自白を迫るが、彼女は最後まで口を割らない。ここに、セネカの死が報じられる。ネロンは使者の語りを聞き終わると、後悔の念に襲われ、サビーヌを追放。自らの過失を嘆く。 (野池)

#### Tristan L' Hermite : *La Mort de Chrispe*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1644年9月、盛名座 (Abraham)

出版 1945年

主な出典 Caussin : *Cour Sainte*

義理の息子への不倫の愛というテーマを扱った先行作品として、Grenailleの、*L'innocent malheureux*があるが、ランカスターは影響関係はないと見ている。また、同じテーマをラシーヌが『フェードル』で追求しているが、トリスタンの場合には、王妃は不倫の愛を打ち明けず、また、慕う息子の死を積極的に求めはしないため、悲劇の緊張はずっと和らいでいる。つまり、トリスタンは、近親相姦という衝撃的なテーマを回避し、礼節を尊重したが、その結果、芝居のやまを取り除くことになってしまったのだった。しかし、初演の頃は大成功こそおさめられなかったものの、1646-7年のオテル・ド・ブルゴーニュ座のレパトリーに入った他、モリエール自身も巡業から帰った後、再演している。時・場所とも単一で、筋もほぼ統一されている。

〔第一幕〕 皇后フォースト Fausteは、夫コンスタンタン Constantin 帝の息子クリスプ Chrispe

に恋をしてしまい、悲嘆にくれている。義理の息子の勇敢さ、知性、名誉にあふれた彼の美しい姿が彼女を虜にし、欲望に燃えるべきか、徳を大切にすべきか、悩ませる。しかし、犯すことになる罪の深さを考え、思い止まろうと決意したところに、腹心の侍女コルネリー Cornélie が、凱旋してきたクリスピの訪問を告げる。クリスピは、フォーストに戦争の経過を語り、敵将の勇敢さも讃える。そして、その敵将の堂々たる態度に圧倒されて彼を逃がした、と打ち明ける。また、その妻と娘が危機に追いやられているため、フォーストの口からコンスタンタン帝に彼女たちの援助を願いでてくれないか、と頼む。敵将の娘コンスタンス Constance とクリスピの関係に一抹の不安を感じるが、フォーストは承知する。

〔第二幕〕 フォーストは再び、愛をとるべきか、美德に順じるかで、深刻に悩むが、また再び、恋の炎を鎮めるよう努力することにする。ところが、クリスピとコンスタンスが恋愛関係にあることをコルネリーの報告から知り、嫉妬に燃える。クリスピは悲惨さの極みにあるコンスタンスへの配慮を求めて、皇后に面会を申し込むが、病気を理由に断られる。フォーストに悪意のあることを見抜いていたコンスタンスは、不安が的中したため、一層悲観的になる。クリスピは父のコンスタンタン帝に彼女を引き合わせて、直接彼女に敵将である彼女の父の命乞いをさせるが、これも失敗に帰してしまう。しかし、更に、彼は自分一人で皇帝の説得に努め、ようやく、賛同を得ることに成功する。

〔第三幕〕 コンスタンタン帝とクリスピの師傳は同じ事柄についてそれぞれ違った夢を見たため、クリスピの身に不幸が起こるのではないかと案ずる。一方、嫉妬に狂ったフォーストは、皇帝に、敵将の命を乞いながらその死を求めるので、皇帝は当惑し、即答を避ける。フォーストは彼女の皇帝への影響力が低下したことに激怒するが、そこにクリスピが現れたため、怒りを彼にぶつける。興奮の余り愛を打ち明けそうになるが、恥辱心に襲われ、思い止まる。フォーストは、退出した振りをしてその場にとどまり、コルネリーとクリスピの話を盗み聞かすが、彼の愛の堅固さを見せつけられる結果となる。

〔第四幕〕 フォーストはコンスタンタン帝に、クリスピとコンスタンスが恋愛関係にあることを教え、敵将を許せば一族の破滅を招くことになる、と主張。皇帝も今度は后を信用せざるを得なくなり、再考を約束する。クリスピはフォーストに感謝の念を伝えに来るが、皇帝の決定の変更を次第に知るに及び、真相を確かめるために父親に会いに行く。続いてコンスタンスも父の助命が成ったと信じてフォーストに礼を述べにきたが、予想に反してフォーストから憎悪に満ちた取扱を受けたため、彼女自身も、自分へのクリスピの愛の深さを吹聴して、皇后に対立する。皇后フォーストは、復讐の手だてを考える。

〔第五幕〕 コンスタンスだけを毒殺することにし、既に、罠をしかけたフォーストは、毒が早く効き目を現すように一人、祈っていると、皇帝が来て、後の義理の息子への冷たさに不満を漏らす。クリスピの師がコンスタンスの急を告げに来、皇帝は彼女のもとにいそぐ。一方、フォーストは近衛隊長からコンスタンスばかりではなく、クリスピも死んだと聞き、自殺の決意をする。彼女が毒を盛って届けた手袋に、クリスピも触れたのだった。コンスタンタン帝は皇后のもとに戻り、死を命ずる。

しばらくして、フォーストが、煮え立つ湯の中に冠を重石にして飛び込んだ、と報告される。皇帝は、遂に、信仰心に芽生え、キリスト教徒として国を治める決意を固めたところで、悲劇の幕がおりる。

(野池)

Tristan L' Hermite : *Osman*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1646 - 47 (?) (ランカスター), 劇団は不明

出版 1656年

主な出典 Saint-Lazare : *Les Histoires tragiques de notre temps*

Victoria Siri : *Mercurio*

Michel Baudier : *L' Histoire générale du Sérail*

出典としてその他に、在コンスタンチノーブルのフランス大使 De Cézzyによるトルコ見聞記を、トリスタンは参照にしたと考えられている。当時流行していたトルコものの、ランカスターによると『バジャゼ』につぐ傑作となるが、作品への言及が当時殆どなされていないことから、上演されなかった可能性もある、と Abraham は考える。出版はキノーの手によって、トリスタンの死の直後なされた。三単一の規則は守られている。重要な役割を担う女性が二人とも固有名詞を持たないのは残念なこと、とランカスターは指摘している。

〔第一幕〕 就寝中のオスマン Osman の姉妹は、悪夢にうなされて大声でどなる。オスマンが殺される夢を見たのだった。二人の女奴隷が彼女の介抱のために入って来る。目をさましたオスマンの姉妹は、悪夢が凶事の前兆なのではないかと不安に思う。暴動の起きる可能性があるため、一日も早く首都を脱出しなければならない時に、女奴隷の一人のファティーム Fatime がオスマンの足下に、ムフティ Mouphti の娘の肖像画を落とし、それを見たオスマンが娘に一目惚れしてしまったため、出発が延びているのだった。オスマンが姉妹に会いに来、四隻の船に全財産を積み込み、脱出の用意は完了した、と報告。後は、未来の花嫁を連れに行く手筈を整えるだけだと言う。そして、ファティームに、彼女の姿形について詳細な質問をし、恋人のイメージを広げて行く。そこに、使者が到着し、娘の親が結婚を許すつもりになったことが、報じられる。

〔第二幕〕 オスマンの姉妹が悪夢の記憶から抜け出られず、悪事の到来を恐れているところに、オスマンが姿を現す。彼は、予知夢を否定。また、姉妹の悲痛な面持の原因が狂人で隠者のムスタファ Mustapha の予言にあるかどうか問う。姉妹は、狂人の予言を侮るオスマンに、天から与えられている彼らの超能力を信じるようさとす。そして、オスマンが近いうちに皇位を奪われる、と予言されていることを遂に、明かす。使者に連れられ、ムフティの娘が来たため、オスマンは動揺しつつ、彼女と対面する。しかし、実物を一目見たとたん肖像画の誤りに気付き、激怒する。魅力のなさに呆れ、彼女を褒めたファティームを叱責する。オスマンは、その結婚がマホメッドの教えに反するものだった

たことを思い知らされたと、述べ、娘に引き取るように言う。失意のどん底に落とされ、復讐を誓う娘に、セリム Sélim が近付き、オスマンを倒す計画ができあがっている、と教える。娘を真剣に愛しているセリムは、オスマンを殺害した後彼女から褒美を得たい、と申し出るものの、オスマンを愛する娘は、色良い返事を与えない。

〔第三幕〕 ムフティーの娘はオスマンの仕打ちを怨み、彼が間もなく殺される運命にあることを思っ自らを慰める。しかし、オスマンの死は、自分の死にも結びつくことにもなるため、混乱してくる。使者の報告から、オスマンが街の暴動を抑え、後宮に戻ったことを知った娘は、苛立ち、そこに姿を表したセリムを叱責する。セリムによるとそれは、オスマン打倒を呼びかけ兵士たちを鼓舞している間のできごとだった。彼は必ずオスマンを倒すと約束するが、娘の方は、いずれにしる報酬の約束は何もしていない、と冷たく言い放つ。

〔第四幕〕 オスマンは彼の師傳に夜のうちに都を脱出するように勧められるが、彼としては夜逃げではなく、昼間、トランペットの音に送られて出航したい。しかし、姉妹によって、後宮が兵士に包囲されたことが知らされる。彼はバルコンに出て、暴徒と話あうが、彼らの要求を拒否したため、攻撃が開始されることになった。

〔第五幕〕 オスマンは運命の気紛れを嘆く。脱出の望みがまだ残されていることに僅かな期待を抱くが、ムフティの娘が現れ、彼女を愛せば帝国を渡すと申し出された時は、それを拒否し、死を覚悟して、街に打って出て行く。残された娘は、オスマンのつれなさを嘆き悲しむが、思いは募るばかり。オスマンに一目惚れをしたのは彼女が先であったこと、オスマンの姉妹に仕えることになったファティームの協力があって、自分の肖像画をオスマンの目に触れさせるのに成功したこと、などを、思いだす。そこにオスマン、セリムの死が報じられる。彼女自身も、胸をつき自殺する。（野池）

なお、トリスタンの悲劇に関しては、拙論『トリスタン・レルミットの悲劇における夢の形態と役割』（桐朋学園大学研究紀要第11集）参照。

Thomas Corneille: *Timocrate*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1656年11月(Yves Giraud).マレー座。ランカスター、シェレール、アダンは同年12月16日とするがジロー氏は *Timocrate* (Librairie DROZ S. A., 1970) の中で訂正している。

出版 1658年

主な出典 La Calprenède: *la Cléopâtre* (Histoire d'Alcamène et Ménélippe)  
G. de Scudéry: *Le prince déguisé* (1634年初演,1635年刊)

悲劇第一作。これ以前に Th. コルネイユは既に喜劇を八作書いた。しかし折からジャンルの変更を考えており、丁度フロンドの内戦後悲劇が書かれていない為そのチャンスであった。しかし兄ピエールとの比較でそれ迄の名声が落ちることを恐れ複雑で意外性に富んだ筋をしたハッピーエンドの小説から題材を採った。作者は悲劇と銘打っているが内容的には *tragi-comédie* と言えよう。内乱後の理想を失った世相にそのロマネスクな内容が見事に受け大成功を収め、1657年中80回上演された。

〔第一幕〕 アルゴスの宮廷。クレタ王ティモクラト Timocrate が率いる艦隊がアルゴス沖に停泊。しかし彼は艦隊に居ないらしい。王女を愛するニカンドル Nicandre を含む三人の封臣が手柄をたて王女を得ようとしている。かつてこの国を救った庸兵クレオメヌ Cléomène がこの機に再び現れる。クレタとアルゴスのこれ迄のいきさつが語られる。“アルゴス王はクレタとの戦いで捕らえられ死んだ。女王は直ちに夫の復讐をせず機会を窺っていた。メッセニアとの戦いで苦戦している時クレオメヌが現れ救われた。その勢いに乗りクレタを攻めた。勝利を得る寸前にそれ迄行方知れずであったクレタ王子ティモクラトが現れ、アルゴスは撤退を余儀なくされた。ティモクラトはアルゴス王となり、父王の意志を受け継ぎ、今アルゴスに艦隊を送ったのだ。”この日クレタ公使が王女との結婚を条件に和平を申し出る。女王は封臣を招集して意見を聞く。クレオメヌを除き全員これに反対。女王はアルゴスへの復讐の決意を新たにティモクラトを亡した者に王女を報償として与える約束をする。王女を愛するニカンドルは目的達成のためクレオメヌに助力を求めるが、彼もまた王女を愛していると打ち明けられる。

〔第二幕〕 王女エリフィル Eriphile は身分のない庸兵クレオメヌを愛している。そして再び現れた彼がアルゴスの和平条件に賛成したことに腹を立てている。しかし彼女はニカンドルの愛の告白を冷たく退け、女王の復讐を晴らした者とのみ結婚すると告げる。一方クレオメヌは彼女にアルゴスの条件を受けるように勧め、ティモクラトの勇氣、高潔を讃め上げる。

〔第三幕〕 王女エリフィルは非常に誇り高い。彼女はクレオメヌを愛するが王女としての義務を優先しようとして葛藤する。次々に入る戦況：先ずアルゴス側の優勢、クレタの將軍トラジル Tragile が捕虜となる。彼はティモクラトがこの国と戦うのは王女エリフィルに恋した為と証言。次に戦況は一変、クレタ側にティモクラトが戻りクレタに有利となり二人の求婚者の封臣は戦死。更にニカンドルが捕虜となりアルゴスの船は焼き払われ、クレオメヌは死んだらしいという悪い知らせ。そこにニカンドルが釈放されて戻ってくる。ティモクラトが彼を自由の身にさせたのだ。そして彼から受けた停戦の提案を伝えるが女王は策略と判断し最後迄戦う宣誓を新たに表明する。その時城外にどよめきの声上がる。クレオメヌがティモクラトを捕らえ、生還したのだ。女王はクレオメヌの身分が不明にもかかわらず約束に従い王女を与えることに同意、翌日婚礼が行われることが決定する。ニカンドルは嫉妬に駆られ、ティモクラトから受けた恩を返しクレオメヌの結婚を覆す決心をする。

〔第四幕〕 ニカンドルはティモクラトに脱走を勧めるが応じない。この囚われているティモクラトは偽者という噂が流れ、トラジルが証言していると云う。ニカンドルも王女もクレオメヌを非難するが彼は全て王女とティモクラトの為と云うのみ、曖昧な態度を取り続ける。遂に彼はトラジルに会うことを要求。連れて来られたトラジルは彼を正面に見ると沈黙。クレオメヌは自分の正体、実は

ティモクラトであることを明かす。この事実を前にして女王はただこれ迄の宣誓を遂行する他に道はない。ティモクラトは王女との結婚が許された後、処刑されることを望み、女王はこれを認める。

〔第五幕〕 王女エリフィルは今や一層ティモクラトを愛する。ニカンドルに彼を救けることを頼むが、恋に破れた彼は絶望の余り何も決心出来ない。婚礼の準備は出来た。王女はティモクラトを死に導く結婚を拒絶する。一方彼は女王の宣誓に従おうとする。民衆はティモクラトの処刑の遅れに騒ぎ始める。突然クレタ軍がアルゴスの町に侵入、占領したという知らせ。ニカンドルは事前にそれを知っていた……女王は全てを放棄する覚悟をする。ティモクラトは彼女に宣誓の遂行を求めるが、宮殿は既にトラジルに率いられるアルゴス軍に占領される。アルゴスはティモクラトの手中にある。しかしティモクラトは引き続き女王の支配を申し出るが女王は退位を決意、これ迄の宣誓を解き、王女に譲位。最後に実はトラジルを解放したのはニカンドルであったことが判明。“クレオメヌ”の恋敵ニカンドルはティモクラトの全てに優位を認め、この裏切り行為だけがアルゴスとティモクラトを救う唯一の方法であったと云う。 (千石)

Thomas Corneille : *Bérénice*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1657年, マレー座 (Lancaster)

出版 1659年

出典 Mlle Scudéry : *Le Grand Cyrus* (Sésostris et Timarèteより)

『ティモクラト』に続く悲劇二作目。大成功を収めた前作と同様に小説に題材を採るが興行的には不成功に終わる。荒唐無稽で複雑な筋書き、愛と義務の葛藤、徳に関する議論、政治上の陰謀、内乱の勃発、実の身分の判明による大団円、など全て前作の繰り返しといえる。スキュデリ嬢の小説のパストラルの要素を除き、新たな子供の取り替え物語を加えて複雑化したが劇として場面割りをし、韻文に書き換えただけで新しい要素は作りだしていない、というのが大方の評価である。レニエはロマネスクな主題を扱うジャンルとして最終的に完成した作品という。

〔第一幕〕 王宮の一室。フリジーの王レアルク Léarque は妹フィロクレ Philoclée を王国の恩人にしてリディーの王子フィロクゼヌ Philoxène と結婚させたい。しかし王子には相愛のベレニス Bérénice がおり、現在結婚の承諾を求める為養育係りのクレオフィス Cléophis がリディーに戻りその帰りを待っている。ベレニスの父親アラクス Araxe は忠臣ではあるが王に対し一言を持ち、特にベレニスに関することになると傲岸で野心家とも見える。王は彼女には寵臣アナクサリス Anaxaris を勧める。彼は王妹フィロクレとの婚姻を望んでいたが潔く諦め王の意向に従ったという。王はそれを以て彼の高潔の証とするが、アラクスは彼を信用しておらず、王の希望にも応じない。ベレニスは父親から王の意向を聞き、王国の利益と身分の不釣り合いによる恋人の不都合を考えこの屈辱に耐える決心をし、恋人フ

フィロクゼーヌに伝える。彼は納得しない。実は彼もまた祖父王の認めない身分の不釣り合いな結婚から生まれ、殺されるところを密かにクレオフィスに預けられ育ったのである。アラクスはベレニスの雄々しく気高い心こそ王冠にふさわしく彼女の出生の秘密と関係があるとのほめかす。

〔第二幕〕 王位を狙ってフィロクレに近づいていたアナクサリスは王の意向に怒りを覚える。フィロクレの愛だけが頼り。しかし一方フィロクレは王位に執着し兄王の決めたフィロクゼーヌとの婚姻をベレニスに誇る。彼女は、彼の愛が野心に囚われること、実はベレニスに恋着していることを見抜いており冷たく彼を退ける。そこにフィロクゼーヌとベレニスとの愛が父王の怒りを買って、王位は弟に譲ること、そして更に彼は実は養育係りのクレオフィスの息子で、王子は幼くして病死したことがクレオフィスの妻の良心の呵責に依る告白から判明、クレオフィスは偽証の罪で追放されたという知らせが入る。フィロクゼーヌはこの地位の降下にもかかわらず毅然とし、改めてベレニスとの愛の許しを王に求める。王はそれを認めフィロクレにアナクサリスを与え後継者にする。

〔第三幕〕 ベレニスはフィロクゼーヌの身分の変化に動ぜず、彼を強く愛していることを告げ、父アラクスの承諾を求めるよう彼に説得する。アラクスに会った彼は実はベレニスが王レアルクの娘であるという手紙を見せられる。説明は次のようである。「現王レアルクは先王であった幼いアティス Atys の養育係りであったが内乱が起り幼い王に不満をもつ軍隊の要請でやむを得ず王となり、アティスを安全な場所に移す為アラクスに預けたが、アティスは国を離れる航海中レスボス付近で遭難、死亡した。この事実は王を牽制したいアラクスの策略によりレアルクの妻にしか知らされなかった。彼女は当時ある城に幽閉されていた。一方レアルクは絶えず王権を狙う諸侯から侵略されていた。アラクスはレアルクの王位篡奪の秘密を握ることで高い地位を得た。そしてフィロクゼーヌのお陰で戦乱は平定した。一方幽閉されていたレアルクの妻は密かに娘を出産したがアラクスは母子の安全の為に当時この事実もレアルクに告げなかった。彼女は経緯を記した手紙を残して間もなく死亡、ベレニスと名付けられた娘はアラクスの娘として育った。その手紙は戦乱時に敵将の手に渡ってしまったが、今やっとアラクスの手に戻されたのだ。」アラクスはフィロクゼーヌとベレニスとの婚姻をこの事実によって王に認めさせようとするが今度はフィロクゼーヌが自分の身分の変化を告げ、更に判明したこの決定的な身分差にただベレニスを王位に付けること、自らは死のみを願う。アラクスは彼こそ王にふさわしいと言う。

〔第四幕〕 手紙を読んでベレニスが娘であることを知り王は喜び、これ迄のアラクスの意図を理解するが、フィロクゼーヌの身分が変わった為、国家的利益から二人の結婚に承知しない。王位を持たない外国人との婚姻は法を侵す為それによって起る暴動を恐れるからだ。アラクスとベレニスはアナクサリスこそ危険な野心家であると忠告するが王の信任は厚い。ベレニスは義務と愛の葛藤に苦しむが、義務に従おうと決心する。ベレニスの地位急変を知らされ、王位への野心が断ち切られたアナクサリスはベレニスを掠奪し軍隊を扇動し、王位を奪う決意をする。

〔第五幕〕 暴動が勃発。アナクサリスは暴徒を鎮め、ベレニスとの結婚を可能にしようと目論むがベレニスとフィロクレに暴動は彼の扇動によるものと見抜かれる。アナクサリスによるベレニス掠奪、フィロクゼーヌによる救出、アナクサリスの死、扇動者を失って四散する暴徒、と次々と入る報告。

そこにクレオフィスが現れ、フィロクゼーヌは実は息子ではなく（リディーの王子も自分の息子も死亡）レスボスの海岸で拾い上げた赤ん坊であると云う。身に付けていた小箱が開けられ父王の肖像が現われる。アラクスは彼こそ遭難死したと思われたアティスと証言。王はフィロクゼーヌ＝アティスに直ちに王位を返すことを申し出るが彼は辞退、ベレニスへの愛だけが王位を可能にするという。フィロクレはリディーの王子（フィロクゼーヌの弟と思われていた）と婚約。 （千石）

Thomas Corneille : *Darius*

ジャンル 五幕韻文悲劇

初演 1658年末、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1659年（D. A. Collins）

主な出典 プルタルコス『対比列伝』

前二作 *Timocrate* と *Bérénice* と同様王位篡奪者の現王と匿名の正統な継承者、その彼と王女との恋が軸となる“tragi-comédie”である。恋に関する部分の出典が幾つか憶測されるがランカスターの云うように前作『ベレニス』のロマンティックな要素を史実に加味したと考えるのが自然と思われる。人物像（王妹アメストリス、寵臣メガビズ）に前二作にないオリジナリテがみられる。

〔第一幕〕 王妹アメストリス Amestris は王位継承の争いで幼くして殺害された甥ダリウス Darius が生存しているという噂をきき、彼女の求愛者である寵臣メガビズ Mégabise にその真偽を問う。彼の父親は現王の命令で当時ダリウスを殺害した。彼は生存を否定する。アメストリスは民衆に人望のある英雄コドマン Codoman がその噂に加担することを恐れている。王位をめぐる流血を避けたいのである。しかしメガビズの本心は王位を篡奪すること、噂は実は彼が流し、謀叛を計画している。そしてそれを成功させるためコドマンを引き入れたい。一方王はその彼にこの噂の源と謀叛計画を調べるように命じ、コドマンを強力な味方にする為メガビズの妹と結婚させることに決める。王女スタティラ Statira とコドマンは密かに愛し合っており、この命令を伝え聞き王女は深く悲しみ、コドマンも納得しない。

〔第二幕〕 アメストリスは王女を励まし、これ迄二人を結ぼうとしてきた努力を打ち明ける。彼女の真意はコドマンを王女と結婚させ王位に付けることである。しかし今流布している“噂”が計画の妨げとなると心配する。彼女の真意を知ったコドマンは見せるべき証拠は無いが実は自分こそダリウスであると告白し、この“噂”には関係していないし、自分の命は王の手中にあると王への恭順を示す。アメストリスは他にそれを口外しないように忠告する。王はコドマン（ダリウス）を味方にするため彼の望む報酬を約束するが、それが王女であることを知ると彼を王位を狙う野心家とみなし、態度を一変させる。誇り高いダリウスはその侮辱に耐えられず、自らの出生を明らかにし、親友メガビズの助けを得て運命に立ち向かう決意をする。メガビズは訪れたコドマン（ダリウス）に“ダリウ

ス”が生存し、自分がその“ダリウス”であると云い、王位を取り戻す助力を求める。

〔第三幕〕 周辺王国の侵略にも悩まされている王は、コドマン（ダリウス）の願いをこの時期を狙った彼の王位獲得の策略と考え、信用するメガビズと王女を明日にも結婚させることに決める。メガビズはコドマン（ダリウス）に王女への愛を友情に免じ諦めてくれるよう頼む。ダリウスは彼の野心を指摘、彼に本物のダリウスである証明を求め、彼の問いに自分の生まれの高さをほのめかす。アメストリスもメガビズの野心を看破し、ダリウスが存在しているとほのめかすが、メガビズはコドマン（ダリウス）の高潔と王の寵愛を頼み動じない。

〔第四幕〕 王女は迫る婚礼を前に、メガビズに翻意を求めるが王の命令を盾に応じない。突然命令が変更、メガビズは剣を取り上げられる。彼の仲間の裏切りにより王は彼が“ダリウス”支持にまわった、と疑い始めたのだ。アメストリスはメガビズにダリウスの王位を継承する血筋の正しさを説くが、彼はアメストリスに自分が“ダリウス”であると思い込ませようとする。王女を失って絶望するダリウスは、自分がダリウスであると名乗りメガビズの命を助けようとするが、メガビズは彼が自分の偽称を暴きに來たと勘違いする。一方王はコドマン（ダリウス）に彼の野心を疑ったことを詫び、暴徒の鎮圧を頼む。「目的」達成を目前に、慎重なアメストリスはダリウスにまだ名乗り出るのは危険であると忠告。

〔第五幕〕 王女は民衆が“ダリウス”と彼女が結婚することを要求している為、愛するコドマン（ダリウス）と結婚出来ないことを絶望している。ダリウスは彼女に初めて身分を明かす。しかし“ダリウス”に対抗する証拠がない。王は“ダリウス”を処罰することのみを考えている。アメストリスが本物のダリウスの存在を王に暗示する。メガビズは民衆の“ダリウス”支持を頼み自分こそ“ダリウス”と主張し王を威す。ダリウスは今や自分の名誉のために名乗り出て、身の潔白の証として死を求める。しかしアメストリスがメガビズの父親から託された手紙を王に差し出し、ダリウスの真実の身分を証明する。王はダリウスに謝罪し、王女を彼に与えることを申し出る。彼は改めて王に進退を問うた後王女に結婚の承諾を求める。アメストリスは周辺の王国カルデシアンの子の求婚を受け、それによって両国間の和平も成立。

(千石)

作品梗概集索引

Bidar : <i>Hippolyte</i> .....	Ⅲ 79
Boyer : <i>Ulysse dans l'île de Circé</i> .....	Ⅲ 95
Corneille, Thomas : <i>Timocrate</i> .....	81
: <i>Bérénice</i> .....	83
: <i>Darius</i> .....	85
: <i>Camma</i> .....	Ⅲ 88
: <i>Ariane</i> .....	Ⅲ 89
: <i>La Mort d'Achille</i> .....	Ⅲ 91
: <i>Circé</i> .....	Ⅲ 98
: <i>Le Comte d'Essex</i> .....	Ⅲ 92
Corneille, Pierre : <i>Andromède</i> .....	Ⅲ 96
Garnier : <i>Hippolyte</i> .....	Ⅲ 74
Gilbert : <i>Hypolite</i> .....	Ⅲ 78
La Pinelière : <i>Hippolyte</i> .....	Ⅲ 76
L'Hermitte de Vauzelle, Jean Batiste : <i>La chute de Phaëton</i> .....	Ⅲ 94
Mairret : <i>Chryseïde et Arimand</i> .....	63
: <i>La Sylvie</i> .....	65
: <i>La Silvanire</i> .....	66
: <i>Les Galanteries du duc d'Ossonne</i> .....	68
Pradon : <i>Phèdre et Hippolyte</i> .....	Ⅲ 81
Rotrou : <i>La Bague de l'Oubli</i> .....	Ⅲ 83
: <i>Les Occasions perdues</i> .....	70
: <i>Cleagénor et Doristée</i> .....	72
: <i>La Belle Alphrède</i> .....	Ⅲ 85
: <i>Laure Persécutée</i> .....	Ⅲ 86
Tristan L'Hermitte : <i>La Marianne</i> .....	74
: <i>Panthée</i> .....	75
: <i>La Mort de Sénèque</i> .....	77
: <i>La Mort de Chrispe</i> .....	78
: <i>Osman</i> .....	80

\* ローマ数字Ⅲは前号掲載分を示す。